

結球白菜の品種及び播種期と病害との関係

河 野 清*

Kōno, K. On the Effects of Variety and Seeding Date upon
the Disease in *Brassica Pekinensis* Rupr.

緒言 白菜は冷涼な気候を好む作物で、甘藍その他の葉菜類に較べて病害に侵され易い本質的罹病性をもっており、特に近年多大な被害を被り、これが解決は今後の白菜栽培の重要な研究課題となつている。白菜品種の耐病性については清水氏 (1951)、和歌山農試等の報告があるが、従来の育種目標が形質にのみ重点を置いて来たので、この面の研究は余り多くない。演者は結球白菜栽培を安定さす一資料として本試験を試み、若干の成績を得たので報告する。

試験方法 供試品種は愛知系、芝罘系、加賀系、花心系交配種に属する 20 品種を検定した。

播種期は 8 月 25 日、9 月 5 日、9 月 15 日、9 月 20 日、栽植距離 2.5 尺×1.5 尺、肥料は N 7.0 貫、P 3.1 貫、K 6.0 貫を施用し、病害防除にダイセーン、ホリドールを夫々 3 回散布した。

調査方法 調査はバイラスでは播種後 60 日目、その他は 72 日目に行つた。罹病指数の算出は中央農研団芸部蔬菜科の大根バイラス病の方法に準じて行つた。

試験成績 (1) 品種及び播種期とバイラス病発生との関係 バイラス病耐病性品種については、大体大、中、小の 3 群に分れ、下山千歳が最も強く、美濃全球、F₁ 金星がこれについだ。系統間に明らかな差は認められなかつたが、芝罘、愛知系のものよりも加賀系のものに強いものが多かつた。次に播種との関係については、播種期を遅らせる程その発生は少くなり、特に 9 月 15 日以降播のものでは急激な減少をみた。

(2) 品種及び播種期と軟腐病発生との関係 白菜栽培において特に大きな障害となつているのは軟腐病

である。試験圃場はやや低湿地で本病の発生は特に著しかつた。品種間についてみると比較的強いと認められたのは下山千歳、早生京 3、F₁ 金星等であり、他は殆んど差が認められない。播種期について遅播にした場合やや発生は抑えられる様だが顕著でなく、9 月 20 播で尙多くの罹病を認めたので更に検討の必要がある。発病時期は植物体の大きさに特に関係し、結球初期に罹病するものが何れの播種期のものについても認められた。

(3) 品種及び播種期と露菌病発生との関係 露菌病の発生は非常に多様で初期に多いもの、中期、後期に多いもの等区々であるが、今播種後 72 日目では品種間には殆んど差が認められず、下山千歳、美濃全球が稍々発生が少かつた。播種期については遅播で稍々抑えられる様だが品種により差がある。

考察 先づ品種及び播種期により明らかな差を示すのはバイラス病で、之は野虫の媒介による故、この発生時期を回避する事によつて発生を抑える事も可能である。次に結球期に入つて近年特に甚大な被害を与えているのは軟腐病であるが、之に対して比較的抵抗性の強い品種は下山千歳、早生京都 3 号、F₁ 金星等であつたが完全ではなく、早播の場合比較的多発し 9 月 15 日播のもので稍々抑えられた。最後に露菌病については下山千歳、美濃全球が稍々強かつた以外品種間に抵抗性の差は認め難い。これらの病害の特徴は高温時より低温に至る長期間に亘り発生するので、防除に万全を期さねばならない。その他の病害としては細菌性黒斑病の発生をみ、特に以上諸種の病害に強い下山千歳、不二完全等に発生が多く見受けられ今後更に検討の必要がある。

*熊本縣農業試験場